

「結婚記念日を忘れるな」

渡海 元三郎

「大平首相死去」のニュースを私は病室のベッドで知った。私もまた、春先から体調を崩し入院加療中であり、予期せぬ選挙に病床から立候補。家族や後援者にすべてをまかせて敵しい選挙を戦っていただけに、入院中の大平さんの胸中は誰よりもわかつているつもりだった。私は突然の訃報に、しばらくの間、声も出なかった。

私が直接、大平さんに接するようになったのは、五十一年十二月から大平幹事長のもとで副幹事長、幹事長代理として二年間女房役をやらせていただいていたからである。側で仕えて、その人柄に心を打たれ、辣腕ぶりに目を見張らされるいくつかの出来事があったが、大平さんから意外な言葉を聞いた二つの思い出がある。

一つは、ある時、幹事長室で「渡海君、結婚記念日だけは忘れるなよ」、ぼつりとそっぴいわれたことである。きよとんとしている私に「今朝、家を出る時、女房に何時頃帰られますかと聞かれて『いつものように十時か十一時頃』と答えたら、『もう駄目ですね』といって戸をしめてしまふ。車に乗ったあとで、今日は結婚記念日だと気づいたんだ」。その日も、会合で遅くなられた大平さんは、帰宅されるや、途中で買った花を奥様に恥しそつに渡されたそうである。このことで、私は四月十五日が大平さんの結婚記念日と知ったのだが、翌年のその日は、英国のサッチャー女史が来日されており、福田総裁主催のレセプションが開かれていた。ホスト役の福田総理は、国会が長びき出席されず、とうとう大平さんが最後までつとめられることになった。平然とされていたが、事情を知っている私は、申しわけないような気がしたものである。

翌五十四年は、大平さんも首相で多忙にされていたが、私は秘書官に、その日だけでも日程を空けておかれるようにと伝えておき、出張さきから花をお届けして、ささやかなお祝いとさせていただいた。昨年は、今から思えば、首相として最後の結婚記念日となられたが、私も入院中であつたため、どう過ごされたのかお聞きしていない。そういえば、ある対談で「夫婦を軸にして作る家庭という世界は別世界です」と話されていた。その別世界を守る興様に、心の底では、深い感謝と愛情を持ちつつつけておられたのではないだろうか。私への言葉は、むしろ自分自身にこのことをいきかせておられたように思える。

もう一つの思い出は、五十二年十二月、首相就任の際に、幹事長人選問題で首班指名の本会議が一日遅れ、党内が紛糾した時のことである。私は福田さんの命を受けて大平さんの私邸にうかがつた。とてら姿の大平さんは、私を見るなり「総理みたいな大変な仕事。させないというのなら、もうやらなくてもいいんだ」といわれる。驚いた私は「日本を背負つて立つべき方が何をおっしゃいますか」と、事態決着の糸口となることを祈りながら党内状況を報告した。幸い翌朝の大福会談で話がまとまり、首相となられたのであるが、もしあの時述べられたように、首相になっておられなかったら急逝されることもなかったかもしれない。しかし時代は大平さんに首相を要請した。旺盛な責任感、厳しい克己の精神を貫かれ、身命を賭して内外の政治的使命を果たされた。

聞くところによると、首相退任後は議員も辞職し、晴耕雨読、悠々自適の生活を望まれていたそうである。「家庭基盤の充実」「田園都市構想」を提唱し、「家庭という善意だけの世界に帰ると、落ち着きと安心をとりもどす」と語られた大平さん。激しくゆれ動く政治の世界に生きながら、いや、だからこそ、ゆとりと安らぎのある暮らしを望まれていたのかもしれない。党本部に掲げられてある温かな笑顔も、私には「渡海君、結婚記念日だけは忘れるなよ」と語りかけておられるようである。

（衆議院議員・第一次大平内閣建設大臣）